

大塚 敬節
矢数 道明
責任編集

世
近漢方医学書集成

76
川越 衡山

名著出版
刊



南京中医药大学图书馆版权所有

近世漢方医学書集成 76 川越衡山

第Ⅲ期
全40卷

昭和五十七年九月二十五日 発行

編者 大塚敬節

矢数道明

発行者 中村安孝

発行者 株式会社 名著出版

東京都文京区小石川三ノ十ノ五
電話東京(八)一五二二七〇番代
振替口座 東京七二〇七四番

製版所 株式会社 日本写真製版社

印刷所 有限会社 伊藤印刷

製本所 辻本製本所



子約限定版

落丁本・乱丁本はお取替えします。

責任編集

大塚敬節

矢数道明

編集委員

山田光胤

寺師睦宗

大塚恭男

矢数圭堂

松田邦夫

凡 例

- 一、本書第七十六卷「川越衡山」には、『傷寒論脈証式』を収録した。
- 一、本書は全て影印版によって収録したが、影印にあたっては次のようにした。
 - イ、新たに柱と頁数を付した。
 - ロ、底本を縮少し、一頁に半丁ずつ収めた。
 - ハ、裏表紙や記事のない白紙は省略した。
 - ニ、底本にある蔵書印及び書き込みは省略した。
 - ホ、印刷不明な箇所は、他の版本等により補正したところもある。
- 一、底本は次の通りである。
 - 傷寒論脈証式 版本（文化十三年版） 八卷六冊（大塚恭男氏所蔵）
- 一、解説は藤平健（日本東洋医学会評議員）が執筆した。

川越 衡山

藤 平 健

一、川越衡山略伝

清和源氏川越詮真の後裔で、詮真九世の孫は関牧庵と称し、医を業として土佐高知に移った。その子の海南は京都に移って、儒医を業とした。衡山はその第五子である。

衡山諱は正淑、字は君明、一字大亮、衡山はその号である。宝暦八年（一七五八）正月一日に生まれた。

『富士川游著作集』には、次のように記されている。すなわち

「先生の中西深斎に就て古医方を修むるや、一意精研其奥旨を極む。深斎大いに喜び乞うて以て

嗣となし、配するに其女を以てす。先生窃に以為らく、深斎の所説未だ仲景氏の蘊を尽さざる所あるに似たりと。乃ち焦心苦慮之を久うして始めて自ら真髄を得たりとなし、これを深斎に質す。深斎可とせず。弁析討駁、兩説相愜わず、以為らく深斎の学帰一の義なしと。遂に辞して旧姓に復し、其自ら得る所の説を主張し而して別に門戸を立て、唱道して曰く、『天道無邪万病一』。其言守株を脱し、其論膠柱を破ぶり、皆大に実用に益あり。既にして名譽遠邇に伝わり、撃を執りて門に及ぶもの数百人、能く一旗幟を建つるもの数十人に下らずと云う。亦盛なりと云うべし。

先生初め靈鑑公主に仕え、文化六年（一八〇九）十二月擢でて典藥寮医師に補せられ、從六位上佐渡介に任ぜらる。文政六年（一八二三）正月累遷して從五位下佐渡守に至る。文政丙戌冬（一八二六）中風を患う、明年やや愈ゆ。齡已に七旬を過ぐ。孳孳猶お生徒を誘い講習廃せず。文政戊子（一八二八）秋旧疾再発、同八月九日家に卒す、享年七十有一。鳥部山実報寺先塋の側に葬る、門生等私に諡して治民先生と曰う。先生藤田氏を娶りて一男三女を生む。男有邦亦典藥寮医生に補せらる、不幸にして先ず歿す。二女亦夭、中女渋谷貞光に嫁し、一男を生む。先生養て以て嗣となし、以て川越氏の祀を承けしむ。

先生人となり謹厚淳朴、進退輕拏せず、言笑亦苟もせず、最も世の業を口頭に銜い、踵を權豪に企るものを嫌忌し、其意にかなわざれば則ち勢家巨族の請と雖も辞して行かず。是を以て人其徳に服し、王門縉紳の使介陸続門に満ち、郡鄙市井の病客来り集まりて庭に溢ると云う。先生嘗

て備前国主の聘に応じ、行て其病を診し、その起たざるを知り帰らんとす、国主之を留むること数日、物件を贈て之を謝せり、先生貴顕の招に赴く毎に敢て嫌忌を避けず、又敢て言辞を飾らず、必ず告るに実を以てす、百に一失なし。世の診を得るもの今の扁倉を以て之を称す、国主素より俊豪の聞あり、特に先生の樸実不華を嘆賞せりと云う。

先生の傷寒論を講ずる、凡そ五十余年、自得の説亦少からず。彦根の人森下驥曰く、川越衡山の傷寒名義を解するや、奇僻太甚、然れども其諸家の未だ通ずる能わざる所を釈て、目下に了然たるに至りては、則ち前に古人なしと謂うべしと。著す所「傷寒論脈証式」、「傷寒藥品体用」、「傷寒奥旨」、「古方拔萃」、「晚方拔萃」、「傷寒論正文」、「金匱要略正文」等あり」と。

以上で衡山に関する大略がわかる。『傷寒論脈証式』の復刻を推奨したばかりに、解題を書かさ



川越 衡山 先生像
『富士川游著作集』より

れる破目になったわけであるが、そう決まって調べに入るまでは、恥ずかしいことながら、衡山を佐渡の人とばかり思いこんでいたのである。各巻のはじめに、「典藥寮司医 川越佐渡別駕正淑大亮著」とあるからである。何のことはない、単なる宮中から発せられる辞令の役職に過ぎなかったのである。なお衡山の著書には、このほか、衡山の講述を門下が筆

記した『傷寒論弁書』という写本があり、東大総合図書館に所蔵されている。

二、『傷寒論脈証式』について

1、書名の由来

図書を出版するに当たって、さて書名をどうしようかとは、いずれの著者も苦勞する所であるが、本書の書名は、どのようにして付けられたのであろうか。

本書の自序に当たると考えられる「傷寒論脈証式緒言」の終りの部分で、著者は次のように述べている。

「夫レ蓋シ此書（註・傷寒論のこと）ヲ学ブヤ、固ヨリ他ナシ。唯ダ脈証ヲ以テスルノミ。脈証ヲ以テスルニ道有リ。曰ク脈ニ形勢有リ、証ニ奇正有リ。形勢奇正ヲ弁ゼザレバ則チ脈証亦何ゾ拠ルニ足ランヤ。宜シク形勢奇正ヲ弁ズルヲ以テ務メト為スベキ也。是ノ故ニ脈証ハ之レ一ニ其字句ニ仮ルト雖モ、而カモ之レ以テ虚実陰陽ニ係ワル。則チ其脈果シテ分寸高低ヲ異ニシ、其証果シテ輕重緩急ヲ異ニスルカ。既ニ分寸高低ノ差ヲ弁ジテ、而シテ形勢ノ脈察スベシ。既ニ輕重緩急ノ別ヲ弁ジテ、而シテ奇正ノ証識ルベシ。而ル後奇正ハ形勢ニ拠リ、而シテ其機ヲ察ス。形勢ハ奇正ヲ待チテ而シテ其態備ワル。是ヲ以テ奇正ハ、形勢ノ式也。形勢モ、亦奇正ノ式也。式トハ、憑依シテ法ヲ取ル所ヲ言ウナリ。診接ノ精、施用ノ活、一トシテ茲ニ出デザルハナシ。苟

クモ医ヲ志スモノハ、豈ニ其レヲ惣諸ニスベケンヤ。是レ余ノ脈証式ヲ以テ、是ノ書ニ命ズル所以ナリ。文化甲子冬至日。川越正淑誌ス。（筆者訳。以下同ジ）と。何だかわかったような、わからないような言いまわしであるが、要するに脈証式とは、脈と証との方式、とでもいった意味なのであろう。

ついながら、この文章でもわかるように、衡山の文体は、持つて回った言い回しがかなり多く、読んでいていらいらさせられることが少なくない。師匠の中西深斎の文体程にはひどくはないが、似ていると思うのは、筆者だけなのであろうか。

2、本書の体裁

本書は全八巻六冊からなる。この時代の著書には、序文、自序、跋文といったものが盛り沢山に載せてあるものが多いが、本書にはそれらはいっさいなく、自序に代って「傷寒論脈証式緒言」というのが記されているのみで、これに本論が続いている。

本論の解説は逐条式で、『傷寒論』の条文の順序にしたがって逐次解釈を行っている。すなわち『傷寒論』の条文を先ず挙げて、それについて解説をしているのであるが、この条文の中で後人のものと思われる箇所は「」で括弧してある。本書には凡例も何もないから、どのようなものに括弧したのかの真意は不明であるが、吉益東洞にならって括弧したものであろう。しかし東洞の

ように括弧しすぎるようなことはなく、納得のいくものが多い。しかし中には、「二陽併病。太陽初得病時。発其汗。汗先出不徹。因転属陽明。続自微汗出。不惡寒。若太陽病証不罷者。不可下。下之為逆。如此可小発汗。設面色縁縁正赤者。……以脈濇故知也。」としてこの条全文を削除し、「此条、後人謾リ二陽ノ併病ノ転機ヲ論ズル者也。従ウベカラズ。」と説いているような所もある。

「設面色……」以下は明らかに後人のものであるから削除するのは当然であるが、この大切な条文を全部削るというのは、あまりにも無茶である。もつとも衡山は、師の深齋と同じく、合病・併病に関しては、後にも指摘するように、全く見当違いな理解をもっているので、勢いこのような仕儀になったのかもしれない。

3、衡山の『傷寒論』に対する見解

本書の緒言で衡山は、「傷寒ノ書ハ、何レノ時代ニ成ルヤヲ知ラズ。世伝ニ云ク、後漢ノ長沙ノ太守張機仲景傷寒論ヲ著トス。然リト雖モ、後漢書及ビ三国志ハ、並ビニ載セズ。或ハ晋唐宋元明ノ諸書、適マ此レニ及ブ者、亦皆追考スル所ニシテ、而シテ更ニ明証有ルヲ聴カズ。蓋シ之ヲ後漢ト断ズル者ハ、特リ其自序文ヲ以テ之ヲ徴スルノミ。抑モ自序ノ撰ニ於ケル、意趣要契ヲ失シ、字句雅馴ナラズ。之ヲ本論ニ較ベ、豈ニ啻ニ天壤ノミナランヤ。恐ラクハ後人千金方芸文志

等二抛り、之が篇ヲ為スモノカ。且ツヤ其名姓ヲ書スルニ、漢字ヲ題スル者ハ、却テ後人ノ手痕ト見ルニ明ケシ。之ヲ要スルニ吾侪稱式スル所ハ、唯ダ其論ト方トノミ。其時ト人トノ如キハ、則チ邈乎トシテ的断スベカラザル也。已ムナクバ則チ措テ論ゼザルモ亦大義ヲ害スルコトナキノミ。今謹ンデ本論ノ作意ヲ稽ウルニ、蓋シ其規矩ヲ易經ニ取ル者也。太一肇メテ陰陽ヲ生ジ、而シテ八卦位ス。邪氣虚実ヲ備エ、而シテ六經定マル。卦爻ハ象象ニ繫ワリ、部位ハ脈証ニ配ス。此レ固ヨリ其道ヲ異ニスト雖モ、而レドモ豈ニ似ル所有ルニ非ザランヤ。且ツ其字句ノ韞古、之ヲ文言繫辭ニ齒シテモ、亦敢テ大イニ誣イズト為サンヤ。是ヲ以テ之ヲ觀レバ、則チ其時ト人トハ、既ニ已ニ上古ニ於テモ、亦知ルベカラズ。然レドモ是レ余ノ私淑スル所ナリ。ナンゾ其ノ之ヲ人為ニ強イセンヤ。」と述べて、『傷寒論』が、後漢などよりはるか上古の作に出てるものであろう。易經などと時代を同じくするのではなからうか、いずれにしてもそれは邈乎として知るすべもない。しかし時代や作者はどうあろうと、その内容がすぐれていればよいのではないか、私はその傑出した論と方とに私淑するのだ、と主張している。常に筆者が感じ、かつ語ったりしていることと全く同じで、読んでいて、思わず「これなるかな」と膝を叩く思いである。

また同じ緒言の中で、「或人曰ク、傷寒ノ疾病ヲ統名スルハ、其言照亮タリ。然レドモ是ノ小冊子ノ論ズル所、其方纔カニ一二過ギズ。一二過ギザルヲ以テ、而モ之ヲ疾病ノ千態万変ニ充テント欲スレバ、則チ牽強附会モ、亦尚才及バズト。吾ハ則チ信ゼズ。曰ク、是有ルカナ、問ヤ。

後人翳膜ヲ吾子ノ如キ所言ニ挙ゲテ、更ニ開眼ヲ二千載ノ後ニスルコトナキ者、往往ニシテ古方家ノ徒ヲ称エ、方ヲ劃スルニ傷寒金匱ニ於テシ、而シテ大イニ唐宋元明ノ方ヲ用ウルヲ羞ジ、斷然トシテ顧ミズ。仲景氏ノ旨ハ然ラズ。凡ソ疾病ノ人ニ在ルヤ、万ニシテ止マズ、億ニシテ尽キズ。猶才人ノ各々ソノ面貌ヲ異ニスルゴトキヤ然リ。然ラバ則チ籍ルニ藥方ヲシテ億万タラシムルトモ、豈ニ尽シテ残サザルコトヲ得ンヤ。是ノ故ニ本論証方ニ繫クルニ、三陰三陽、及ビ傷寒中風ヲ以テスル也。此レ其証方ニ於テスレバ、則チ茲ニ劃スルガ如シト雖モ、而モ其三陰三陽及ビ傷寒中風ニ於ケルヤ、則チ固ヨリ茲ニ止マラズ。宜シク以テ漁獵スルニ万億ノ疾病ニ於テスベシ。夫レ既ニ知ルニ三陰三陽及ビ傷寒中風ヲ以テシ、而シテ普ネク億万ノ疾病ヲ漁獵スレバ、則チ亦自カラ証方、茲ニ劃スルガ如キ者、啻ニ其馳驅ヲ茲ニ從横ニスルノミナラズ、亦復タ謨範ヲ茲ニ取り、而シテマサニ唐宋元明ノ諸家ノ証方ヲ為扨シ、以テ之ヲ施用に供スベシ。是ノ故ニ余オモエラク傷寒論ヲ以テ衆病ヲ治スル者ハ、証方ヲ此ノ謂ニ劃スルニ非ズ、惟ダ是レ三陰三陽及ビ傷寒中風ヲ以テシ、而シテ普ク億万ノ証方ヲ漁獵スルノ謂ナリト。然ルガ故ニタトエ方劑ノ今ニ成ル者モ、亦三陰三陰ノ謨範ニ汎濫セザル者ハ、採リテ以テ之ヲ用ウ。況ンヤ唐宋元明ノ方劑ニ於テオヤ。能ク方ヲ傷寒金匱ニ劃スルヲ惡マンヤ。世ニ古方家ト称スル者ハ、未ダ古方ヲ知ラズト謂ウベキ也。豈ニ其ノコレヲ思ワザルベケンヤ。」と述べて、傷寒・金匱の藥方だけを墨守するのが古方家ではなく、真の古方家なら、『傷寒論』の治病の方式の深奥を汲み取って、これを

『傷寒論』以外のあらゆる薬方にも応用し利用する者でなければならぬ、と説いている。達識の言というべきであらう。

この心構えは『傷寒論弁書』の巻頭にも述べられている。すなわち

「傷寒論ハ、医家必用ノ書ニシテ、苟モ我道ヲ志ス人、片時モハナタレヌ者也。他ニ数十卷ノ医書多シト雖モ、皆コノ論ニシカズ。故ニコノ論ヲ熟読シテ、治術ノ規則トナシ、晩世ノ医書数百卷ヲノゾミ、末世ノ諸方善ナルモノハ選ミ用イ、不善ノ者ヲスツルトキハ、医ノ道尽セリト云ウベシ。(和文)」と。

4、衡山の病に対する考え方

衡山の病というものに対する考え方は、精氣と邪氣とのたたかい、と見る所に尽きるようである。したがって陰陽虚実は、邪氣が体を犯したとき、すなわち病氣が始まったときにはじまるとする。三陰三陽は病氣の流れだとみる。まさに筆者の年来の所説と同じなのである。『傷寒論』を経験医学の粹と感じとって、熟読玩味すれば、どうしてもこのような結論に到達せざるを得なくなる。『傷寒論』を内経後の産と見なし、内経の思想で解釈しようとするからおかしくなる、と筆者は思うのだが、どうであらう。

これに関する所説を、本書並びに衡山の他の著書から見てみよう。

「夫レ惡寒ノ三陽三陰ニ亘ルヤ、亦說ナカルベカラズ。蓋シ邪氣ノ軀殼ニ在ルヤ、必ズ精氣ニ敵セントナス也。ソノ敵ノ淺クシテ未ダ深カラザレバ、精氣ハ必ズ之ガタメニ屈履シ、必ズ常ノ調度ヲ得ントスルコト能ワズ。惡寒ハ此ニ本ヅキテ出ヅ。之ヲ陽位ノ惡寒ト爲ス也。ソノ精氣ニ敵スルノ深クシテ淺カラザレバ、精氣ハ必ズ之ガ爲ニ耗損シ、必ズソノ常ノ調度ヲ失ウ。亦惡寒ナキ能ワズ。之ヲ陰位ノ惡寒ト爲ス也。惡寒ノ、ソノ形狀ハ一ナリト雖モ、而モソノ分別有ルヤ此ノ如シ。豈ニ忽視スベケンヤ。」（『脈証式』卷一）。

「抑モ邪氣ト云ウ者ハ、天地不正ノ一氣ニシテ、ソノ形有ル者ニ非ズ。人ノ常正ニ對スルノ名ニシテ、既ニ体ニ感觸シテ後、必ズ寒熱有リテ陰陽從ウ。邪ハ本ト一ナレドモ、感ズルノ淺深緩急ニ因テ、或ハ陽、或ハ陰ト違ウ也。向ウヨリ此ハ寒邪、此ハ熱邪ト云ウテ、二ツ有ルモノニ非ズ。……夫レ人ハ、父母ヨリウケ得タ所ノ一氣有リ。所謂先天ノ元氣也。其氣独リ成立スルコトナラヌユエ、乳汁穀肉胃ノ府ニ入り、其氣以テ彼氣ヲ補佐シ、一身四末ニ巡流シ、一トシテ至ラザル所ナク、アツカラズ、サムカラズ、人ノ常溫ナル者ナルニ、邪氣来リ感ズルトキハ、寒熱從イ、寒熱從ウトキハ、初メテココニ陰陽ノ名出ヅ。ナンゾヤ常ニ陰氣陽氣ヲ備エ有ルモノニ非ズ。論中ノ実ハ邪氣ノ充実也。虚ハ精氣の虚也。熱ハ実ニ属シ、寒ハ虚ニ属ス。是ノ故ニ論中ニ内ノ虚耗ヲ指シテ寒ト云ウ。又水氣ヲ指シテ寒ト云ウ也。然ラバ寒字ニ異道有カト云エバソウデハナイ。夫レ邪氣人身ニ感ジ、外肌膚中ニ止マルトキハ、精氣以テ之ヲコバミ、正氣ト邪氣ト交々戦闘シ

テ、其激動外表ニ達シ、或ハ発熱、往来寒熱、身熱、潮熱悉ク顕ル。……」（『傷寒論弁書』）

「サテ論中陰陽ヲ云ウ者ハ、皆三陽三陰ノ義イカニゾトシテコレヲ云ウナレバ、傷寒トバカリ云イテハ、亡羊トシテワケガ立タヌユエ、此ヲ二ツニ分チテ陰陽トスル也。其二ツノ者ノ中ヨリ輕重ヲタテ、三陽三陰ト六ツニ分ツ。六經ノ名義ハ古名也。仲景氏ニ始ル者ニ非ズ。ユエニ人ヨク此ヲ知テ居ルユエ、病ノ輕重緩急ニカリ用ユル也。全ク五臟ニ配シ、經絡ニ求ムルノ義ニハ非ズ。人身ニ邪感觸ノ姿ヲ、傷寒トノミ云テハスマヌユエ、緩急ヲ分チテ陰陽ト云イ、即チ寒ト熱トニ歸ス。其邪ノ淺深ヲ六ツニ割リ、ココニ方法アズカル也。其源一邪ニシテ、陰陽ト分レ、寒熱ト違ウハイカナル故ゾト問ウニ、人ノ常ニ守ル所ノ精氣ヲ耗虚スルノ多少ニ依テ、此ノ如ク異ル也。……」（『同』）。

「凡ソ人ノ体ニ於ケルヤ、精氣貫通シ、血液宣布シ、苟クモ一点ノ虧隙ナシ。此レ之ヲ其常ト為ス也。既ニ此ノ如ケレバ、則チタトエ其氣候ヲシテ逆ナラシムトモ、ナンゾ之ヲ傷ウコトヲ得ンヤ。而シテ況ンヤ氣候ノ順ナルニ於テオヤ。必ズ其常ヲ守リテ害無キ也。

若シ夫レ人ノ体ニ於ケルヤ、固ヨリ病ナシト雖モ、而レドモ衣食ノ適セズ、情欲ノ從ワズ、勞逸ノ節セザレバ、則チ一時ノ虚、一時ノ不足ヲ為サザル能ワズ。既ニ此ノ如ケレバ、則チタトエ其氣候ヲ順ナラシムルトモ、ナンゾ其常ヲ守ルコトヲ得ンヤ。而ルニ況ンヤ氣候ノ逆ナルニ於テオヤ。必ズ傷ヲ被ラザルヲ得ザル也。是ニ於テカ、病ムト病マザルトハ、我自カラ取ル。豈ニ之

ヲ天地四時ノ氣候ニ強ウルノ爲ニセンヤ。』（『傷寒藥品体用』卷ノ二）。

これらは、前述したような衡山の疾病観を、よく語っているものと思う。

5、衡山の脈と証とに対する考え方

衡山の脈に対する考え方は、極めて『傷寒論』的であり、かつかなりユニークなものであるように思う。本書の緒言の中には次のように述べられている。すなわち

「弁脈法、平脈法ハ、疑ウラクハ是レ宋ノ高繼沖、当時編録、進奏ノ旧ニシテ、孫奇等ノ削去ノ遺文也。其陰陽表裏ヲ論ズルガ如キハ、氣血營衛、臟腑ノ虛実也。之ヲ以テ病証ニ繋ケズシテ、単ニ之ヲ脈ニ断ズ。又其五行配當、四季不同、尺寸参差、呼吸出入ヲ論ズ。之ヲ漏刻ニ推シ、之ヲ菽数ニ正ス等、既ニ素問難經ニ比類スル者也。豈ニ敢テ之ヲ本論ノ脈式ニ配センヤ。

夫レ蓋シ本論ノ脈式ニ於ケルヤ、状ヲ以テ之ヲ言ウモノ有リ、又勢ヲ以テ之ヲ言ウモノ有リ、精論セザルベカラズ。浮ハ三陽ノ經脈トナシ、沈ハ三陰ノ經脈トナス。遲数弱弦細微ハ之レ浮沈ニ緯タリ。疾ト促トハ之レ表裏ニ反ス。洪大ハ之レ内外ニ亘ル。此レヲ之レ脈ノ状ト爲ス。緩緊滑瀼ハ則チ皆脈ノ勢ヲ以テ之ヲ言ウ也。故ニ固ヨリ之ヲ一態二期スベカラザル者也。蓋シ緩緊ノ勢ニ於ケルヤ、以テ邪力ノ駿劇ト平易トヲ察シ、滑瀼ノ勢ニ於ケルヤ、以テ精氣ノ主虚ト不主虚トヲ察ス。緩ハ、以テ其勢ノ安舒ナル之ヲ言ウ。緊ハ、以テ其勢ノ怒力タル之ヲ言ウ。滑ノ